

編集の序

エコー診療の普及・発達によりこれまでよく分かっていなかった病態や疼痛の理由が明らかになってきていると実感している。私はエコー診療に出会うまでは、単純X線像やMRIなどの「静止画」で病態や疼痛を想像することが習慣で、よくわからないまま「思考停止」し、従来の教科書に書かれている治療法を漫然と行ってきた。たしかに、この診かたでもほとんどの状況でなんとなく内服薬を処方し、リハビリテーションを行うことでその場をやり過ごすことができる。若いときの私は目の前の患者さんをなんとなく納得させる話術だけは上達していったように思う。しかし、個々の疾患に対する病態把握や治療法を考える能力は全く進歩していかなかった。

私には日常診療で大切にしている言葉がある。それは、東京帝国大学医学部医学科内科学の教授であった沖中重雄先生の著書『医師と患者』の中に書かれている“書かれた医学は過去の医学であり、目前に悩む患者のなかに明日の医学の教科書の中身がある”という言葉である。若いときの私はまさに過去の医学のみを実践し、新しい病態解明や治療、医学の進歩という考えは全くなかった。そして、この言葉と共に私の考えを大きく変えたのはエコー診療であった。これまでの診療ツールにエコー検査が加わることでさまざまなものが可視化できるようになり、診療についてより考えるようになった。

本書ではまさに目前に悩む患者さんに対して、さまざまな知識、技術やツールを駆使して診療にあたっている先生方にご執筆いただくことができた。それぞれの専門領域のエキスパートの先生方に「明日の医学の教科書」について詳述いただけたことに心から感謝している。

本書の特徴は、エキスパートの先生方と編者と若手医師がWeb座談会を行い、エキスパートの先生方に日常診療での疑問やちょっとしたコツを直接聴きながら作ったところにある。ここ数年で急速にWeb会議システムが発達したことで、新しいスタイルの教科書を作ることができた。「明日の医学の教科書」を「新しいスタイル」で書籍化できたことに心から感謝している。また、明日からの診療に本書が大いに役立ち、医学の進歩に貢献できることを切に願うものである。

2022年6月

金沢大学大学院医学系研究科 整形外科
中瀬順介